浅学菲才の故に明瞭な輪郭を描くことはできなかった。」

この「あとがき」にも述べられているように、本書では記録に残った老い観や看取り観が主として記述されていて、歴史上の老いの実態や看取りの実態にあまり迫っていない。「老いと看取りの社会史」であれば、老いと看とりの実態を知りたいと思うのだが、述べられているのはどちらかというと老いと看取りについての考え方の歴史であることに物足りなさを感じる。

評者のこういう感覚から見ると、この本の中で引用されている『医心方』『啓迪集』『養生訓』『病家須知』等の医書の内容よりも、『源氏物語』『今昔物語』等に出て来る「老い」や「看取り」の様子により興味を引かれるのである。これらの物語や説話は作り話ではあるが、医書よりは当時の世相の実態を反映しているところがあるのではないかと思う。

著者が何度か引用している藤原定家の『明月記』は日記であるから物語よりも資料的価値はさらに高い。著者はこの所は引用していないが、『明月記』の最初の方にある定家の父俊成の臨終の模様は看取りの記録としてまことにリアルで興味深いものである。「死ぬべくおぼゆ（死にそうに思う）」という俊成の生の言葉も記されていて印象深い。しかしこれを詳しく紹介するのは小稿の目的ではないので、興味ある方は『明月記』をひもとかれると良いと思う。

以上、遠慮のないことを述べさせて頂いたが、もとよりこれだけの著書を書き上げるのは並大抵のことではない。史料、記録、研究書の類に広く目を通し、著者にとっては専門外の医学の領域の資料についても妥当な判断をしてまとめているのは敬服に値する。また前に述べたこの本の物足りなさは同じ著者の『死と病と看護の社会史』によって補うべきかも知れない。いずれにせよ、今後この方面において何かを調べまたは何かを書こうとする者にとって本書は必見の文献であることは間違いない。

（中村　昭）

〔法政大学出版局・東京都千代田区富士見二―一七―一　電話〇三―三二三七―七三四一、一九九一年、四六判・二五一頁・定価二四〇〇円〕

岩田誠著『パリ医学散歩』

本書は、西暦六五〇年に建てられたオテル・ディユー病院に始まり、十九世紀後半に到るまでの主にパリを中心とした医学的記念碑及び病院について、その歴史、活動状況が二十五編にわたって記載され、興味深いことは、それぞれ登場する先駆者の一人一人が生きた姿として著者の巧みな文章によって一つの魅力あるドキュメントとして書かれている。著者は現在東大医学部助教授（神経内科）として活躍中であるが、若き日パリに留学、その経験を基に市内随所に散見される医学的記念碑を一つ一つ丹念に訪ねその印象を語り、文献を駆使して先駆者の足跡をたどり、本書はその人間像を浮き彫り

にした極めてユニークな著書となっている。

パリは医学史の宝庫と言っても過言ではない。現代医学誕生の地、近代病院発祥の都市であり、長く世界の医学をリードしてきたが、これらを掘りおこした趣のある著書がいつか世にでるのではないかという予感はしていたが、とうとうでるべくして世にでた感が深い。「あとがき」の著書の言を借りれば「パリは、実にどっしりとした重みのある、奥深い町だった。…きっと私の属している医学の世界においても、これ（注＝文学の世界）に劣らぬ程の歴史の跡を残しているにちがいないと思うに至った」とある。正に著者の力量はもとより、天の時、地の利、人の和を得て世にでたものであり、「あとがき」にそのことがよく表われている。

内容の概略とその印象を述べるならば、本書には登場する医師達の知られざるエピソードが書かれている。例えば「パストゥール」は、フランスの生んだ一人の天才によって成し遂げられた輝かしい業績ではなしに、彼の酒石酸の光学異性体に関する発見のドラマが書かれている。そして最後の発見に到った時のビオーとの緊迫したやりとりは、読む者をして息をのむほどの正に科学者の厳しい気迫が伝わってくる優れた短文となっている。また彼のクロード・ベルナールに対する友情が述べられているが、二人が科学者である前に情愛豊かな人間であったことを教える心温まる手紙が載せられている。「合衆国広場にあるウェルズの石像」は、外科麻酔の発見者と題し、その発見の裏に秘められたアメリカの三人の男の確執とその悲惨な末路の描写は考えさせられる。パストゥールのそれとは対照的に世界医学史上の陰の部分であり、人間の物欲と名誉の故事として銘記されるべきものがある。明と暗と云えば輝かしい光とこの上ない陰惨の二つの歴史があった「シャリテ病院」であろう。前者はコルヴィザールに代表される診断学の基礎を築いた臨床医学教育であり、後者は「外科の父」アンブロアズ・パレも行わなかったという砕石術である。

また傑作なのは「フィリップ・リコール」のエピソードである。梅毒をはじめとする性病の研究で有名であるが、この包容力のあるユーモアに満ちた人物の言行録は、読者をして実に味わい深いウィットに富むものがある。

フランス医学の神髄を見る思いがしたのは、「シャルコー」とその弟子「ポール・リシェ」の記載である。この中で読みとれるのは、フランス医学の本質ともいうべき「見る医学・行動する医学」という臨床の実践医学が脈脈と彼等に流れているということだ。シャルコーは若い時、画家になりたいほどのすばらしい画才の持主であった（注・パストゥールもそうであった）といわれるが、彼の「見る」神経学、「形あるものの観察の重要性」を説いたシャルコー火曜講義録は、「観察につぐ観察」、「見つづけ、また見る」態度が常に基礎におかれていたという。我々は、読んだり書いたりする以前に、自然科学の必須条件たるポール・リシェのいう「観察」、「形」、「眼」を改めて身につけておくことを知らされる。この意味

でパストゥールが後進を励ます時に用いた言葉「トラヴァイエ、トラヴァイエ」は、正にその実践を表わすものであり、かつて衛生学校（エコル・ド・サンテ）のフルクロワが言った言葉「読むことは少なく、見ることと為すことを多く」は、フランス医学精神を強固に裏打ちしたものといえよう。

最後の「失語症巡礼」は、ポール・ブローカ、マルク・ダクス、ジャン・バティスト・ブィヨーの三人が述べられている。がここの編で注目すべきは、本論とは別に、三人の足跡を探し求めようとした著者の心とその姿ではなかろうか。そしていずれも共通するところは、著者がパリ留学中実際に訪れた医学史の旅のロマンである。そしてここに著者が言わんとしたことは、なるほど三人の足跡を巧みな文章で述べているが、いかに表現しても表現しつくせない著者の自分の追い求める心を追い求めた激情に近い叫びであろう。彼等を育んだ町、学んだ場所、そして彼等の眠る土地に行き、そうしてそこに立ち、形なきものを見ると同時に、言わずして語りかけてくる声を聞くその行為自体は、いつわらざる著者の願いであるからだ。だから黒い髪をした日本人等みたこともない南仏の町ソミエールで、マルク・ダクスの生家を訪れた時の著者の言葉「まさに感無量であった。道をそれてここまでやって来た甲斐があった」は、著者の姿が目にみえるようで、フランス医学史を地で行く新鮮なロマンと香りと躍動感を感じさせる。

最後に若い医師にもぜひ読んでいただきたいのは「あとがき」である。この本の上梓は、「この日本に、医者でありながらフランス語などを勉強するような人がいたのか」という著者自身の新鮮な驚きから発したのであり、結果的に本書は、著者が青春に出くわしたフランスとのかかわりの結晶といえるものではあるまいか。

（清水　陽人）

〔岩波書店・東京都千代田区一ツ橋二―五―五　電話〇三―三二六五―四一一一、一九九一年、一九三頁・二〇〇〇円〕

松尾信一編・著『解馬新書の調査研究』

著者は信州大学農学部家畜解剖学教授でこのたび定年を迎えられ、本書は退官記念論文を兼ねての刊行となり、同学の徒として欣びひとしおである。

獣医史学は学会が設立されて二十周年、このため医史学会を兄として仰ぎ研鑽している次第であるが、一方個々の分野でも松尾氏の如く医史学との関連を保持しながら、秀れた業績をおさめている人々も多い。

蘭馬医菊池東水は江戸後期の嘉永五年（一八五二）獣医解剖書『解馬新書』を著わしているが、その表題の如く杉田玄白らが翻訳した『解体新書』の影響を受けていることは、序文の次ぎに記載する引用書目の筆頭に明記されている。しかしその内容は蘭学の素養師に優ると称された大槻玄沢が筆を加